



▲東大寺大仏殿には、部分的に銅屋根が採用されている

◀当時の鑄仏は、重量380t、高さ16m(現在の大仏よりも1m大きい)におよんだ

# 東大寺大仏鑄造

## 歴史を動かした銅のチカラを検証

### 失われた宝剣が、東大寺大仏の下に

昨年10月、かつて東大寺大仏の台座の下から発見されていた二つの剣が、約1250年間にわたり行方不明とされていた「失われた宝剣」であると発表された。これは聖武天皇没後、妻の光明皇后が正倉院に奉納した「国宝珍宝帳」の武器リスト筆頭に記されながら、行方がわからなくなっていた幻の二つの剣である。光明皇后は、正倉院ではなく、あえて大仏の下にこの宝剣を埋納したようであり、いかに東大寺大仏が当時の人々にとって平和と権威の象徴とされていたかを物語るエピソードともいえるだろう。

天平15(743年)年、聖武天皇は、天災や天然痘が蔓延し、飢饉に苦しむ人々を救い、国の安泰を願って「大仏建立の詔」を発令した。これに応え、全国から約260万人もの人々が建立のために集められる。また各地より数々の奉納品、そして400t以上もの銅が納められた。大仏開眼会(かいげんえ)が挙行されたのは天平勝宝4年(752年)、大仏殿が竣工したのは天平宝字2年(758年)と約15年もの歳月を費やした一大国家プロジェクトである。その成否の鍵を握っていたのは、当時、銅の先端技術を持つ渡来の人たちであった。

本誌(167・168号)ではいままで東大寺大仏鑄造にまつわる銅の軌跡を辿り、大分県・宇佐神宮、山口県・長登銅山を訪ねてきた。今回の宝剣の報を機に、改めて銅の技術と日本の歴史の関わりについて検証したい。

### 朝廷が大仏鑄造成功を祈願した「宇佐神宮」

大分県宇佐市にある宇佐神宮に八幡神が鎮座したのは539～571年。当時宇佐は、朝鮮半島との交流の中継点としての役割を担い、渡来人により銅の加工技術が伝えられていた。“銅直(どうちやく)”という珍しい姓の方がいるが、この姓は宇佐神宮が与えたものであり、鑄物師などの職業を示す姓といわれている。宇佐神宮の影響下にあった福岡県の香春岳には採銅所があり、奈良時代につくられた銅鏡も残されている。聖武天皇は、大仏鑄造にあたり宇



国宝に指定されている宇佐神宮本殿、金色に輝く欄は金銅欄



東大寺大仏殿には、いまなお多くの人が観光に訪れる

佐神宮に使いを遣わし、祈願した。これに対し宇佐八幡神は託宣を下し、大仏鑄造を助成したとされている。「銅加工技術があったからこそ、朝廷は宇佐神宮に伺いを立てたのではないか」と指摘する人もいる。結果として、大仏鑄造に貢献した宇佐神宮はその名を轟かせ、全国に4万社といわれる八幡様の総本宮となる。

### 日本最古の銅山「長登銅山」

山口県美祢市の「長登銅山」は、日本最古の銅山であり、東大寺大仏に使用された多くの銅が長登銅山のものだといわれている。長登の名前も「奈良の大仏鑄造の銅を献上し、その恩賞として“奈良登(ならのぼり)”の地名を賜ったが、それがなまって長登となった」との伝承もある。それを実証す



いまも長登銅山の坑内壁面にはあちこちに緑青が見える

るように、東大寺に残された鑄造跡から発掘された溶銅塊と長登銅山の銅の成分が一致。長登銅山では、硫化鉍から銅を製錬する技術が、当時すでに確立されていたとされる。“続日本書紀”には、「聖武天皇の時代に、長門の国から銅鉍が出てそれを精錬してお金に鑄込むことができた」とわざわざ記録されている。これは、当時、銅の製錬技術がいかに古代の日本文明を躍進させるエポックメイキングな出来事であったかの証しだ。

…銅の製錬技術、加工技術を有する宇佐神宮と長登銅山。この二つの地は、大仏鑄造という一大国家プロジェクトに貢献することで、歴史の表舞台に躍り出ることとなった。まさに銅の技術革新は、日本の歴史をも動かす大きなチカラを秘めていたのである。